中国「八〇後」文学の旗手、韓寒
～『三重門』と銭鍾書『囲城』およびサリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』との比較を中心に～

楊冠穹

一、韓寒によって脚光を浴びた「八〇後」文学

人民共和国建国以来、中国文学史においては政治や社会環境の変化に伴い、様々な流派が次々と現れた。二十一世紀現在の中国文学は、市場経済と密接な関係を有し、改革・開放政策に深く影響されてきたが、この新時代文学の主要な担い手の一つが文化大革命の影響を直接受けることなく、外来文化や当代思想を受容して育った世代、いわゆる「八〇後（一九八〇年代生まれ）」の作家たちである。「八〇後」についての研究は、中国の現在を知るためになくてはならないものと考えられるが、日本ではそもそも「八〇後」文学を知る人が少なく、他方中国における「八〇後」文学は文化論としてよりも社会現象として扱われることが多い。「八〇後」文学の先駆者と呼ばれる韓寒（一九八二～）でさえも、学界では未だに文学者あるいは小説家であるとは十分に認識されていないのである。

上海金山区生まれの韓寒は、新聞編集者の父を持ち、中学時代から少年文芸誌『少年文芸』などに投稿して文芸活動を始め[1]、社会問題に対して強い関心を持っていた。一九九七年末頃から中国のマスコミは中学及び高校の国語教育に対して深い関心を寄せるようになり、翌年には青年学生を主な読者とする文学雑誌『萌芽』が、「どのように教育すべきか」[2]をテーマに連載を始め、現在中国の国語教育が抱えるさまざまな問題を論じている。このような教育問題の深刻化を背景として、文系の天才を発見するために、一九九八年に文芸誌『萌芽』が呼びかけ、一九九九年には北京大学や復旦大学、華東師範大学など計七校の大学が共同で新概念作文大会を開

催した[3]。大勢の中高生が大会に殺到する中、韓寒は最終審査当日に遅刻したために追試の機会を与えられ、そこで出題された作文のテーマは、試験官が即興でグラスの中に紙を丸めて捨て、そのグラスと紙について記せというものであった。当時十七歳であった韓寒は、まさにこの短時間の内に書いたエッセイ『グラスの中から人間を見る（杯中窺人）』によって世に名を馳せることとなったのであり、同作は後にエッセイ集『零下一度』（上海人民出版社、二〇〇〇）に収録された。彼は一千字程度の文章のなかで、古今東西の典故を引用し、人生・人間性に対してきわめて理性的な意見を述べたのである。それは沈着かつ辛辣な言葉でもって、社会に対する失望と不満を現していた――韓寒は人材育成の制度に懐疑を抱き、風刺と比喩を主な手法として、中国における指導的な教育理念に対し極めて強い反感を示したのだ。

二〇〇四年、韓寒は「八〇後」世代の代表としてアメリカの週刊『タイム』誌アジア版に取材され、そこで「新急進分子」と称されてアメリカのビート・ジェネレーションと同一視された。[4] また広州の評論誌『新週刊』は二〇〇八年末に、「彼の理知的思弁は、われわれに“八〇後”に対する希望を持たせてくれた」と述べ[5]、韓寒が知識人としての責任を果たしたと絶賛した。さらに週刊新聞『南方週末』は韓寒を「二〇〇九年代表人物」に選び、彼の評論について「時代と共振でき」、「一人の真新しい人道主義者が自由の波長を発している」[6]と評している。そして二〇一〇年、韓寒は再び『タイム』の「二〇一〇年世界で最も影響力のある一〇〇人」に選ばれ、世界の注目を集めたのである。このように評価されてきた韓寒であるが、彼はまた二〇〇六年に、中国社会科学院研究員で権威的な文学批評家の白燁（一九五二～）をはじめとする大勢の文化人を相手に、「韓白之争」と呼ばれる論争を行ってセンセーションを巻き起こし、これにより文学界における「八〇後」世代および自らの名を高めた。彼が編集長を務めた雑誌『独唱団』の創刊号見本の表紙は「襠（中国語で“党”の語呂合わせ）中央有槍」（本義は「ズボンの真中に鉄砲がある」だが「中国共産党中央には鉄砲がある」をも意寓する）を表現した図版を載せていた。これは、二人の農民が警察により射殺された貴州省の事件を想起させる中国

共産党に対する揶揄だとして同誌は検閲不合格となったが、後にようやく発売に至ると、わずか二十二日目で売り上げ一〇〇万部を突発したのだった[7]。韓寒はまさに現在の中国における風雲児なのである。

しかし、多くの中高生が韓寒の文才に傾倒する中で、デビュー当時の韓寒自身は、高校の学期末試験で七科目も不合格だったために停学処分となり、進学校の松江二中を中退、その後は名門の復旦大学から聴講生として無試験入学を勧められたが、彼はあっさりと辞退している。その理由を本人は、「現行教育についさっきひどい悪口を言ったのに、利益を得たからといってすぐ大学に行くのは、すごく卑怯な行為だと思う」[8]からだと言うが、こうして韓寒は高校を卒業しないまま、自伝的小説『三重門』（作家出版社、二〇〇〇）で鮮烈なデビューを飾り、二〇〇万部を売上げた同作は過去二十年間で中国最大のベストセラーの一つになった。『三重門』は教育制度への批判をテーマとし、教育改革直前の中国の学生の不満を代弁した作品であり、同書の流行と作者の退学とをマスコミがニュース・評論で取り上げる一方、教育界をはじめとする各界の権威筋は同書に対し強く反発し、議論はいっそう熱を帯びた。またこの現象に伴い、「八〇後」の作品群も正式に中国社会で文学として認知されるようになった。

「韓寒現象」が白熱化した翌年、「八〇後」を語るに欠かせないもう一人の作家が登場した。二〇〇一年、当時高校生であった四川生まれの郭敬明（一九八三～）は第三回新概念作文大会に参加し、最優秀賞を受賞した。大学進学後の彼はファンタジー小説『幻城』（春风文艺出版社、二〇〇三）によって作家デビューを果たした後、ピュアな文体によって青春時代の愛や痛み、孤独などをテーマとする作品を多く執筆し、若者の間で大きな反響を呼んでいる。中国では新概念作文大会をきっかけに青春小説が流行したが、これまで落落（一九八二～）や笛安（一九八三～）など郭敬明式文体を継承する「八〇後」作家が次々と現れる一方、韓寒の後継といえる作家は出現していない。韓寒の小説は『三重門』から最新作の『一九八八～この世界と話したい』(国際文化出版、二〇一〇)まで一貫して、中国の社会問題に対し批判的態度を取っている。同じ青春小説といえども、韓寒は郭敬明らの「八〇後」作家とは異なり、夢や愛ではなく、ユーモラスな

誇張表現によって常に現実を語るのである。彼はネットにおいて、あるいは批評家から、「魯迅の再来」と称され、若い世代の一種の精神的リーダーと見なされており、まさに「八〇後」文学における異色の存在といえる。

拙論は、韓寒のデビュー作である『三重門』と銭鍾書『囲城』およびサリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』とを比較しつつ、他の「八〇後」とは異なる韓寒独自の文体およびその批判精神の原点を解明し、韓寒の文学が現代中国社会において、どのような役割を果たしているのかを検討したい。

二、作家韓寒の原点――『三重門』

『三重門』は上海郊外の中学校を舞台として、受験と恋愛という青春物語を描いた自伝的小説である。中学生の林雨翔は、文学サークルの旅行で、同校で成績トップを誇る Susan という欧米風の別名を持つ美しい女生徒に恋をし、ラブレターを書いた。しかし彼女の返事は「三年後に清華大学で会おう」という大変そっけないものだった。その後、林は母の麻雀仲間のコネで進学校に入学したが、一方の Susan は彼の高校よりも低偏差値の学校に進学することになった。Susan と音信不通になった林は失意のうちに夜の街を彷徨うが、それを友人により密告されると、他の事件も絡んで大問題となった。ちょうどその時 Susan から電話があり、彼女が進学校に入らなかったのは、林と同じ高校に行きたかったために、故意に入試で失敗したからだったと告げられた。林はその告白にショックを受けたが、Susan はむしろ彼の起こした事件に激怒していた。林は退学処分と愛する女性から嫌悪されるという事態に動揺するが、彼の思いは周囲に理解されない。勉強は将来金銭と地位を得るためのものだと断言する麻雀狂の母親、偽知識人の教師、利己的な同級生、すれ違いの恋愛というように、『三重門』では、現代人の主人公・林雨翔が繰り広げる中学・高校生活が生々しく描き出されている。

小説の題名である「三重門」という言葉は、これまで様々に解釈されてきた。本作における「三重」は『中庸』の「天下に王たるに三重有り」を典故とし、それには三つの重要な意味が含まれている。[9] また、教育の面から見れば、「三重門」とは高校・大学受験および社会で生きていくため

の就職という人生における三つの関門であり、あるいは社会において考えれば、それは学校・家庭・社会という解くことのできない桎梏であるとも言えよう。いずれにせよこの中国語の単語が、作品発表以降に一つの常用語として定着している。[10]『三重門』は「八〇後」文学のなかでも、最も早く商品化された作品であり、後には日本語版（二〇〇二、訳題『上海ビート』[11]）や韓国語版（二〇〇八、訳題『삼중문（三重門）』[12]）も出版されるなど、その商業的成功は大きかった。

そのユーモラスな文体と、登場人物の口を借りた教育批判によって、社会の内面を暴く『三重門』は、出版当時からあらゆるメディアや評論で銭鍾書（一九一〇〜一九九八）の『囲城』と比較され、少年版『囲城』として大いに話題を呼び、今ではほぼ毎年重版され[13]広く読まれている。十七歳の少年韓寒によって書かれた『三重門』に溢れる若さと無鉄砲さ、そしてそれゆえの面白さは文学史的にどのように位置づけられるのか。また、同作は社会にどのような影響を与えたのか。本稿はこの問題を考察するものである。

三、『囲城』と『三重門』その一 ——共感覚的比喩による表現

銭鍾書は『管錐編』など多くの文学研究著書を執筆しており、中国のみならず外国の古典にも通じる学者である。彼が一九四五年から一九四六年にかけて書いた唯一の長編小説『囲城』（一九四七、邦訳『結婚狂詩曲』[14]）は、出版当時から高く評価され[15]、九〇年代初頭にはそのテレビドラマ化をきっかけに、再びブームが起こり[16]、最も著名な銭鐘書作品として世界に知られている。そして二〇〇三年に韓寒は、自身のエッセイにおいて「『囲城』は本当にとてもいい作品だ。この本は私に小説はこういう風にも書けるのだと教えてくれた」[17]と述べ、『囲城』が『三重門』創作の手本となっていることを明言した。

ただ、『囲城』に現れる「フランスから上海への帰国 → 上海から内陸地の大学への就職 → 再び上海へ戻り結婚」という動線は、物語が終始地元で展開する『三重門』で再現されることはなかった。両作は物語の構成を見る限り全く接点のないように見えるが、しかし多くの読者が両作は相似

しているという印象を抱き、『三重門』は『囲城』の模倣作にすぎないという批判が突び出すほどなのである。むろん、韓寒が『囲城』から影響を受けたと語ったのは一種のアピールかもしれないが、他のより著名で優秀な作品ではなく、彼がわざわざ『囲城』に言及しているのにはやはり重要な意図があると考えられる。『三重門』は、韓寒にとって最初の長編小説であり、本格的創作というよりはむしろ習作に近い。まるで模範文から金言名句を選び出して暗記し、そうして作文を書く学生のように、韓寒は一小説として『囲城』を受容したのではなく、その中の豊富な言葉遊びに魅かれたのであろう。『囲城』は『三重門』にとって、そしてそれ以降の韓寒作品にとって、韓寒式文体を形成するための重要なヒントを与えてくれたのではあるまいか。

例えば、『囲城』を含めた一九三〇・四〇年代中国文学創作の中で特徴とされた余計者[18]としての登場人物は、『三重門』の中でも出現する。『囲城』の主人公である方鴻漸は「大学をロンドン・パリ・ベルリンと、三つも変え、いい加減に講義を幾つかを聞いて、興味はいささか広くなったが、心得は全くなく、生活はとりわけだらしなかった」[19]という青年で、彼は父親と自身の留学に出資してくれた舅（母方の兄弟、おじ）との板挟みになり、結局偽の博士学位を金銭で買ってしまう。さらに故郷の学校で講演した際には原稿を忘れ、「海外交通ひらけて何百年来、ただ二つの舶来品が全中国社会において永遠不滅でありました。一つはアヘンであります、一つは梅毒であります」[20]という発言で笑い者となるなど、まさに山師見習いのような偽知識人であった。これに対して『三重門』の主人公林雨翔は、幼い頃から父親に『尚書』・『論語』などの暗記を強いられ、町中から「才子」と呼ばれたが、ついに「何も読まなくなってしまった。国語の教科書も捨ててしまった」[21]。その挙げ句、林雨翔は文学サークルの旅行中に見かけた諧謔詩を見破れず、「名作」だと誤解して皆に笑われる。何でも批判したがる林雨翔は「臆病で、不満はお腹の中にしまったまま、内臓の間での交流にのみ供する」[22]ような人物であり、方鴻漸と林雨翔は共に、知識人のふりをするも知識不足で笑われ、不正行為に抵抗感を抱くもそれを打破する勇気もないという中国式余計者を演じている。

このような登場人物や社会に対するユーモラスな比喩表現を用いた諷刺は、両作において多く出現する。例えば『囲城』の中で、唐暁芙に対して方鴻漸が抱いた第一印象は「見る人にのどのかわきを忘れしかもまたかぶりつきたくさせるほど新鮮な、まるでみごとな果物だった。眼はさほど大きくなかったが、生き生きしてあたたかく、大抵の女の大眼玉が政治家のひろげる大風呂敷、中味が空っぽなのと好対照だ」[23] と表現され、ここで読者は唐の具体的な容貌を知り得ず、書かれた文字から想像するしかないが、銭鍾書は読者が容易にイメージできるように唐暁芙の眼に焦点を当て、おそらく誰もが見たことのある「新鮮な果物」にたとえたのだ。この描写はまた、若くて愛らしい唐暁芙の姿を描くと同時に、政治家を諷刺してもおり、やや風変わりな唐暁芙に備わった特別な清新さと魅力を一層引き立てている。一方、『三重門』にも Susan の登場場面の描写に同様の効果を認められる、それは「背負っているリュックを包み隠さんばかりの長い髪は、誰もが心を奪われるほどキラキラと輝いている」[24]——「*女が見たらあまりにも恥ずかしくなって剃髪して尼さんになったり、男が見たら自分の手が地方の汚職官吏の魔手のように長くはなく、目線で愛撫するしかないことを恨む*」[25] というものだ。旅行中、林に接近する沈渓兒の友人としてはじめて登場した Susan は顔すら出さず、その美しい髪の描写だけで、読み手に「輝いている」という印象を抱かせるのである。ここでもまた、韓寒は髪に焦点を当てながら汚職官吏に対する風刺も忘れておらず、それを「目線」でも「愛撫」したいほど美しい Susan の描写へと繋いでいる。

国広哲弥によれば、人間は五官を通じて感じることができ、これらの五感の中にある感覚分野を表現するときに他の感覚分野に含まれる語彙を比喩的に用いるが、それを「共感覚的比喩」という。[26] 本体（比喩されるもの）と喩体（比喩するもの）との間に距離を置きながら、喩解（両者をむすびつける共通点）[27] を利用することでより適切な表現が可能となり、読み手は新鮮な感覚を覚えると同時に語り手と伴に連想の跳躍を経験し、結論へと辿り着くのである。「政治家のひろげる大風呂敷」のみでは理解し難いが、その直後に「中味が空っぽ」という語り手の補足説明があることで、読み手も納得できるのである。その距離が広ければ広いほど読者はギャップを

感じ、最後に「なるほど」と思った瞬間、まるでバンジージャンプをしたような快感を得るのである。このような比喩は『三重門』および『囲城』の中で随所に見られる。

「*国語教科書の中で作家の文章のテーマや趣旨は、保守的な男女の恋のようで、ぼんやりとほんのちょっとだけ感じられるだけで、深く隠されており表面には現れない*」[28]；「テーマを明らかにするためには、遺跡を発掘するような苦労と忍耐力が必要だ。まず、こびりついた泥を落とし、埃を払い、掘り出したあとも保護が必要である。より大きなものを発見したら、補修も必要であり、とても疲れる」[29]。（『三重門』）

「海外に出るのは疱瘡が出たり、麻疹が出たりするようなもので、一度は出なければいけない。子供に麻疹や疱瘡が出たら、もう安全に成長でき、以後この二つの病気にぶつかっても、うつる心配がない。ぼくらが海外に出て来るのも、健全な精神を育てて、博士とか修士とかいう微生物どもに出くわした時に、自衛できる抵抗力を持ちたい一心からなんだ」[30]。（『囲城』）

文章の趣旨（本体）と保守的男女の恋（喩体）、博士・修士（本体）と微生物（喩体）、そしてテーマの解明と遺跡の発掘（喩解）、出国することと疱瘡や麻疹の発病（喩解）というように、銭鍾書と韓寒は読者にそれぞれ二つの比喩を読ませている。いずれの作品においても、これら本体と喩体との関係は、日常的知見からは考えにくい比喩のパターンであるが、作者が独自の視点によって共通点を見出すと、最終的に比喩として成立するだけではなく、さらには読み手の経験や感覚を呼び起こして強いインパクトを与える。両作を読み終えた読者は、思わず笑ってしまい、無意識のうちに作者に誘導されながら警句の快楽を体験するのだ。銭鍾書によれば、こうした共感覚比喩表現を用いて互いに無関係の事物を読み手に連想させ、それらを文字で綴る修辞方法は西洋詩文の中で逸早く現れた[31]というが、これには大量の基礎的知識と深い想像力、またそれらを言葉によって繋ぎ合わせる高い修辞能力が必須であり、決して容易なことではない。それは中国比較文学の第一人者と目された銭鍾書には十分可能であったかもしれないが、一少年であった韓寒にとっては、大きな挑戦であったこ

とだろう。これはまた、当時若冠十七歳の少年であった韓寒が、『三重門』という大作を書き上げたことに対して、読者が大いに驚いた主な理由の一つでもあるのだ。

四、『囲城』と『三重門』その二 ——語り手と作者の発話の混在

『囲城』は豊富な知識と巧妙な比喩で評価される一方、芸術性から見れば完璧ではないと批判も受けている。黄國彬氏はその例として、婚約した後態度が一変した孫柔嘉に対する方鴻漸の心理描写を挙げている。[32]

「自分に言ってきかせた、熱烈な愛情は婚約まで来るともう頂点で、一たび結婚してしまえばすべてはお終いだ。(中略) 世界には人間が二種類いるだけです。たとえばブドウを一房手に入れると、一方の人間は一番よさそうなのから先に食べ、もう一方の人間は一番よさそうなのを残しておいて最後に食べます。(中略)第二類の人間にはまだ希望があり、第一類の人間にはただ追憶あるのみであるからです。恋愛から共白髪までは、ちょうどブドウの一房で、とにかく最上の一粒はあるが、最上はたった一粒きり、希望の綱として残しておけば、どんなにいいか？」[33]

山羊ひげの哲学者の比喩は方鴻漸の心理活動の一部として語られているが、直接話法を用いた（特に日本語の場合は敬語が機能する）ため、読み手に語り手の存在を強く意識させ、方鴻漸との心理的繋がりが弱くなる。その一方で、仮にこの言葉がないとしても小説の展開にはほとんど影響しないと言え、むしろ同作からこの一節のみを抜粋しても一つの優れたエッセイとして読めるのである。これらによって、読者に文章を楽しませているのであろうが、しかしこの一節が小説に埋め込まれてしまったため、各登場人物の会話、考えや心理活動の描写において、時に作者が物語に介入しているようで、文章はもはや単なるその人物の会話、考えや心理活動の描写ではなくなり、読み手を混乱させる。このような場合、語り手は肉体を持つ存在から離れ、「作者その人であると無頓着に考えられる」。[34] 実際、こういった語り手と作者の発話の混在は多数の一人称小説の特徴でもあり、「私小説」の由来とも関係している。だが、三人称小説においては、『囲城』と『三重門』のように「わざと」という強いイメージを読者に与える

ものは少ないのだろう。

『囲城』の登場人物の一人、高松年はまず地の文で次のように紹介されながら小説に現れる――「三閭大学学長高松年は老科学者である。この「老」という字の位置は非常に厄介で、科学を形容できるし、また科学者も形容できる。不幸なのは、科学者と科学が大いに異なり、科学者は酒みたいに、老いるほど値打が出る、そして科学は女みたいに、老いぼれると一文にもならないことだ」[35]。語り手によりあたかも小説中の登場人物の言葉の如く語られこの警句は、本来なら方鴻漸が放つべきであろう。そして韓寒も同様の語り口を採用したことにより批判を受けた。例えば『三重門』の中では、林雨翔が文学サークルの活動に初参加するとき、満員の教室に入ると、語り手は次のような文学批判を展開する。「こんな時代でも文学を崇め奉る人がまだ多いのは、文学が古臭い証拠だ。旧態依然としたものは、往々にして古くなるほど人を集める力を持つものだから。しかし、同時に文学は若いのだとも言える。美女は若いほど追いかける男が多いものだから。どっちにしろ――若さを輝かせていようが、死にかけていようが――、一つだけ確かなことがある。文学が成熟した中年であることは、決してない」[36]。この一節の前後の文章はすべて事実を描写する地の文であり、語り手も明確に設定されていない。だがこの一節は、韓寒のブログにある「中国の文学が良くならない大きな原因は（中略）彼らの最大の理想がおそらく文壇を老人ホームに変えることだからだろう」[37] という論調と一致しており、読み手は韓寒（作者）と思しき語り手の存在を意識する。こうした語り手と、作者と等身大のもう一人の語り手との混在は、『三重門』や以後の作品の中でもしばしば見られるため、韓寒作品は小説としての連続性に欠けているのではないかと批判されており、彼は小説ではなく常にエッセイを書いているのだという指摘も少なくない。[38]

『三重門』と『囲城』両作における以上の例においては登場人物が不在であるか一時的に退場しているため、特に読み手を混乱させることはないが、小説『囲城』において作者である銭鍾書が自らの考えを登場人物の人格に過剰に投影する場合があることは否定できない。例えば方鴻漸が蘇文紈の家を訪ねたとき、諸慎明と蘇文紈が『囲城』の題名の由来ともいえる

会話をする場面である。

「Bertie の結婚離婚のことなら、ぼくも当人と話したさ。あの人は英国の古い言葉を引いたよ、結婚はあたかも金色の鳥籠のようで、籠の外の鳥は入って住みたいと思い、籠の中の鳥は飛び出したいと思うって。だから結んでは離れ、離れては結び、終局がない」と、慎明。

ミス蘇が言った、「フランスにもそんな言葉がありますわ。だけど、鳥籠とは言わないで、包囲された城砦 forteresse assiégée だって、城の外の人は攻めこみたいし、城の中の人は逃げ出したいって思う。鴻漸、そうね？」鴻漸は頭を振って知らぬのを示す。[39]

蘇文紈の言う「包囲された城砦」はまさに「囲城」であり、これもまた作者である銭鍾書が蘇文紈という登場人物の枠を突き被って顔を出す一例である。ただし、ここは諸慎明と蘇文紈ともに「聞いた話」として伝えているのみで、作者・銭鍾書としての人格は前述した方鴻漸の例ほどには目立たなく、これは銭鍾書が読者の混乱を防ぐために用いた一つの叙述法とも解釈できる。韓寒はこうした作者と思しき語り手の介入の方法を、さらに大胆に用いて社会批判したのである。

また、不良品のウォークマンを買い、「一人になった雨翔はようやくしげしげとその機械を眺めてみたが、まるでボスニアから逃げてきたみたいに傷だらけだった――外見は汚くてもいい。中国人が最も重視するのは中身である。だが、その中身もひどかった。しばらくは鳴っているのだが、まるで人間らしさが身についたみたいに、ひどすぎる自分の声の恥ずかしさのあまり声を出そうとはしなくなった」[40] という、邦訳において四文に分割された林雨翔をめぐる描写は、中国語原文では実は一文で綴られている。林はこの一文における唯一の主語であるが、「中国人が最も重視するのは中身である」という韓寒と思しき語り手によるこの発話は、高校生の林の認識というよりも、韓寒自身の意見と言うべきであろう。韓寒はこうして「地の文 ― 自らの意見 ― 地の文」という文体で、読み手に作者としての語り手の存在を常に意識させている。このように作者が自らの見識を小説の登場人物の口を借りて展開するという叙述方法は、決して韓寒の創作能力の未熟さとして批判されるべき欠点ではなく、むしろ『囲城』に対

する一種の大胆な挑戦として評価されてよいであろう。

「悲劇は人生の価値あるものを、うちこわして見せ、喜劇は人生の無価値なものをひきさいて見せる」[41]。『囲城』も『三重門』も読者を笑いの渦に巻き込む一方で、現実に対し無力な人間と、人間であれば誰もが備える欠点とを描きながら、社会批判を行っている。この批判精神は韓寒が銭鍾書から継承したものであろうが、重要なのは韓寒自身が述べたように、彼が小説『囲城』を読んで「文学とは実は文字の学問」[42] であると悟ったことだ。彼は『囲城』を文学作品としてではなく、むしろ言葉を紡ぐための参考書として読んだのである。韓寒が『囲城』独自の語りのスタイルを独自に解釈し、同時代の「八〇後」とは異なる個性的な文体を生み出したことは、高く評価できよう。

五、『ライ麦畑でつかまえて』と『三重門』――家出する孤独な少年

『三重門』の成立を理解するために、加えて言及すべき一作がある。それは現代アメリカ文学の代表作の一つ――サリンジャー（一九一九～二〇一〇）が一九五一年に発表した小説『ライ麦畑でつかまえて』（以下『ライ麦』と略す）である。同作の中国語翻訳は、中国国家図書館のデータベースによれば、一九六三年（作家出版社）と一九八三年（漓江出版社）[43] に出版されている。しかし、譯林出版社編集部によれば、この両版はすべて非公開の内部刊行物「白書」であり、正式に出版されたのは同社による一九九八年版[44] が最初であるという[45] が、それはちょうど『三重門』創作の開始直前にあたる。[46]

実は、中国において、『ライ麦』は地下文学として一九七〇年代より文学青年の間で流行し、ビート・ジェネレーションの代表作として受容されてきた。[47] その後同作は若者読者を中心に広く読み継がれ、中国国内で現在販売中の二〇一一年版同作は、発売後一年間で売り上げ四〇万部を記録し、二〇一三年には早くも四回重版されており、中国において最も長い受容の歴史を誇る外国青春小説である。そしてネットによる情報が溢れている今日、作者サリンジャーの生涯に精通する韓寒が、『ライ麦』のあらす

じすら知らないことは考えにくい。仮にあらすじのみを把握していたとすれば、韓寒がサリンジャーの人称や口調の影響を受けず、骨としての物語構成と設定のみを借用した可能性も想定できよう。そこで、まず両作における人物設定の類似性について以下に検討してみよう。

『ライ麦』は、主人公である高校生のホールデンが高校退学の勧告を受けてから三日間の出来事を描く。ホールデンはルームメートと喧嘩した後、衝動的に学校から飛び出しニューヨークへ向かったが、思ったような放浪は経験できなかった。一旦家に戻り、妹のフィービーに心の底にたまった思いを吐き出している最中、両親が帰宅したため再び家を抜け出し、ヒッチハイクで西部へ行こうと決意する。しかし、これはすべて療養中のホールデンによる話であり、ホールデンは結局精神病にかかったと判断された。『ライ麦』は『三重門』と同様に、欺瞞に満ちた大人の社会を非難し、社会制度を批判することで、多くの若者の共感を得た青春小説である。しかしこの二作に関する比較研究は皆無に等しく[48]、物語構造の類似性に触れる先行研究成果も見当たらない。

ホールデンの語りかける相手は「好きな作家でもある兄貴」[49]であり、彼自身も英語だけは以前勉強した知識を覚えているため、「ゼンゼン勉強しなくてもよかった」[50]。ホールデンは四科目で不合格だったため退学となり、ルームメートのストラドレーターと衝突した後、ニューヨークへ向う。しかし、ニューヨークのホテルで売春婦を部屋に呼ぶも、結局ホールデンは買春せず、その売春婦に五ドルを渡したためトラブルとなりひどい目にあう。これに対して、『三重門』の林雨翔には大学で中国文学を専攻とした兄がおり、そして林自身も幼い頃に大量の古文を暗記していたため、国語だけは得意だった。高校に進学後、林は五科目も不合格となった挙げ句、同級生との気まずい関係や Susan への未練などが原因で、ついに学校の寮から抜け出して気晴らしを求めに出かけた。彼は騙されて不良品のウォークマンを高値で買い取った後、いつの間にか眠気を覚えて街の中で寝てしまう。彼が目を覚ましたときはもう夜明けで、寮に戻ることもできなく、また一人で街を彷徨った。しかし外泊は規則で禁止されているため、林はこの一夜の出来事を隠そうとしたが、ルームメートに密告され、退学

という局面を迎える。このように学校にも家にも戻ろうとせず、夜中に街を彷徨う林はまさに中国版のホールデンである。

『三重門』の舞台は、教育改革が進行中の二〇〇〇年前後の中国の中学校・高校である。当時、中国では学生定員が大幅に増加し、教育は利益を生み出す一つの産業となっていた。多くの教師は生徒のためという教育の本質を見失い、整理された知識を子供たちに教えるという教育の基本理念すら喪失していた。最大の悲劇は、生徒やその親たちまでもが、こうした現実を受け入れたことである。「やることといったら、将来キャディラックが買えるような身分になるために物をおぼえようというんで勉強するだけなんだ」[51] とホールデンが言うように、林雨翔の母は「今勉強するのはね、お金と地位を手に入れるためなの。いい学校に入らなかったら、どうやって稼げるっていうんだい！」[52] と学歴の功利性のみを強調している。それに対して成金二世の梁梓君は「どうせオヤジは金持ちだし、おれが勉強してどうするんだよ？勉強が金のためだっていうんだったら、もう目的は達成してるぞ」[53] と同調するのだ。『三重門』の冒頭は、中学校を舞台に一人の生徒をめぐってストーリーが展開し、彼が様々な非難を受ける。しかし、世故に富む大人だけでなく、中学生の梁梓君さえも歪んだ価値観と人生観を持つという設定は、読者により強い衝撃を与えてきたと考えられる。

『三重門』と『ライ麦』のどちらにおいても、自分の理想とこうした現実との間にある落差に気づくのは主人公のみであった。これはまたジャック・ケルアックの『路上にて』（一九五七）などの青春小説とは異なる点である。林雨翔は不満を「お腹の中にしまったまま」口に出せない臆病な少年であった。彼は「モンテスキューと同じ種類の人間である。勉強は嫌いだが、嫌いの度合いはまだ、今の教育体制を脅かすほどのレベルにはなっていない。もっともそんなレベルになれば、教育体制につぶされてしまう」[54] のだ。このような林は唯一国語教師の馬徳保に共感を抱くが、この馬徳保も実は偽の知識人であり、軽薄な言動で何度も恥をかき、しまいには文学サークルを金銭で釣り、全国最優秀文学サークル賞を獲得すると、その業績をもって名門の学校へと転職していく。馬と別れた林は、母親のコネによりスポーツ特待生として進学校へ入学したが、彼にとっての高校生活は

中学校のそれとほぼ変わらず、あるのはより複雑な人間関係と寮生活だけだった。「学校というのは社会主義建設に携わる人材を育成するところだ」[55]と信じ込んでいる謝景淵や、常に大風呂敷を広げる成金二世の銭栄という二人のルームメートに囲まれた林は「早くも耐えられなくなっていた。部屋には話し相手もいない」[56]状態で、まさに「まわりはイカレた奴らばかりだった」[57]と嘆くホールデンのように、自分と周囲の人々との差異に茫然とするばかりで、やがて虚無感を覚えた彼は、ついに学校の寮から抜け出すのである。

一方、英語のみ合格したホールデンは家出をして二日目、宿を求めて「これまで接した中で一番いい先生だった」[58]という英語のアントリーニ先生の自宅を訪ねた。アントリーニ先生はホールデンを自宅に招き入れたが、そこで学校教育について説き始め、先生はホールデンが「どこまでも堕ちて行くだけ」の「特殊な堕落」「恐ろしい堕落」に向かっていると言う。先生には彼が「きわめて愚劣なことのために、なんらかの形で、高貴な死に方をしようとしていることが」[59]はっきりと見える、というのである。そして、精神分析家であるウィルヘルム・シュテーケルの言葉「未成熟な人間の特徴は、理想のために高貴な死を選ぼうとする点にある。これに反して成熟した人間の特徴は、理想のために卑小な生を選ぼうとする点にある」[60]を紙に書いてホールデンに渡すが、先生の説教に全く興味のないホールデンは瞬く間に眠り込んでしまい、目を覚ますと先生が自分の頭を愛撫していたのでホールデンは「一千フィートばかしも跳び上がった」[61]。彼はなんとか身支度を整え、どうしても見当たらないネクタイは放置し、先生の部屋から逃げ出したのである。

このような社会環境にいる林雨翔やホールデンは反抗する力を持ち得ない一方、自らが憎悪する類の人間へと自分も変わってしまうことが許せなかった。『ライ麦』の訳者野崎孝は、同書の解説で「子供にとって、夢を阻み、これを圧殺する力が強ければ強いほど、それを粉砕しようとする反撥力は激化してゆくだろう」[62]と述べている。彼らの叛逆は現実社会との対立であり、「どこの世界にもある不可避的現象」であり、「純潔を愛する子供の感覚と、社会生活を営むために案出された大人の工夫との対立」[63]なので

ある。『三重門』のなかで、林雨翔の逃亡は無意識的な行動だと表現されているが、それは醜い現実から抜け出すための出口であり、彼が心の純潔を守るための選択でもあるのだ。「遠くで汽笛が聞こえた。どこか遠くへ行ってしまおう。そんな思いが頭をかすめた」が、臆病な彼は「途中で飢えて死んだらどうしよう。何とか餓死を免れたとしても、いったいどこに行けばいいというのだろう」[64] と考え込んでしまう。

ただ一人の主人公を中心に物語が単線的に進行していく両作の構造は、彼らが大人たちや、仲間であるはずの同級生のいる現実社会に馴染むことのできない孤独者であることを示すものである。「誰かに電話したいと思った」[65] が「二十分かそこら電話ボックスに入ったあげくにそこを出る」[66] ホールデンのように、林雨翔もまた孤独だったのであり、周囲に理解者は誰もいなかった。学校を飛び出した林が心配していたのは、「点数だけ見る」両親はもう助けてはくれないのではあるまいか、あるいは周囲の同級生に自分の処分が知られて軽蔑されるではないかということだ。仮にこの絶望が林をホールデンのように「精神病」へと追い詰めてもおかしくないであろう。ホールデンは妹のフィービーにこう言った――「（前略）誰もいない――誰もって大人はだよ――僕のほかにはね。で、僕はあぶない崖のふちに立ってるんだ。僕のやる仕事はね、誰でも崖から転がりおちそうになったら、その子をつかまえることなんだ」[67]、と。そして林雨翔もこの崖に立っており、「行くべきか、行かざるべきか。次々と現れるゴタゴタから逃れて自由になれるかもしれない。いや、逃れられはしないのだ――まるで断崖絶壁に突き出した石につかまって、足下に千尋の谷が広がっているようなものだ。よじ登るなんてできっこない。手が痛くて血が流れているのに、手を離していいものか、わからない」[68]。韓寒は、林雨翔という中国版ホールデンを通して、世紀が替わる時代の激変する中国社会において、一人の迷える少年を描いたと言えよう。

以上、『三重門』と『ライ麦』との類似点を検討したが、筆者が韓寒のプロデュースする電子刊行物の編集者であり韓寒の親友でもある人物に韓寒に確認して頂いたところ、「『ライ麦』を読んだことはないが、作者サリ

ンジャーの引退はとても正しい選択だ」と答えたという。[69] 韓寒がサリンジャーの一九六五年引退という伝記的事実に関心を寄せている点を考えると、前述の通り、韓寒は『ライ麦』を読んでいないにしても、この古典的名作のあらすじは了解していると考えてよいだろう。宮台真治によれば、近代学校教育は、都市労働者を養成することをその最大な目的としていた。しかし、成熟社会化する、すなわち近代過渡期から近代成熟期に移行すると、近代学校教育に対する要求 (都市労働者の養成) と、近代学校教育を支えていた条件 (苦役の中和) の、双方が劇的に変わる。後者から言えば、苦役を中和していた「社会の透明さ」と「未来の輝き」はともに失われ、学校で忍耐する時間は「意味の空白」に脅かされはじめる。[70] 言い換えれば、教育機会さえ均等に与えられなかった時代には、文字を知り、知識を得ることは社会において自分の生活保障に直結しており、そのことは自明のことであり、教育を拒むものは少なかった。だが、教育制度成熟発達により、特に義務教育によって機会が均等に与えられるようになった結果、高校という高等教育機関でも、国民的目的が消え、学習することの意味を自明的に考えられなくなった。その結果、ホールデンのような人間が生まれるに至った。つまり、ホールデンのような人間が生まれるのは一定の成熟期を迎えた社会状況下で初めて可能になることである。

韓寒が高校生活を実際経験し、『三重門』を創作した一九九九年の中国は、高考（大学入学ためのセンター試験）の拡大政策により、前年度に比べ四二％の増加率を果たした。前述したように、当時は社会全体が教育問題を直視しはじめた時期であり、まさに先ほど述べた教育制度の成熟期であった。実は、アメリカにおいても『ライ麦』が創作された一九五〇年代は、「八年研究（一九三四〜一九四二）」[71] という教育改革が実施された直後であった。これもまた、青春と反逆性をセットとして語られた多くの青春小説の中で、『三重門』と『ライ麦』との類似性を論じる際に重要な背景であろう。二〇世紀末の中華人民共和国では、改革・開放政策により経済的繁栄を迎えると同時に、教育問題をはじめとする多くの社会問題が浮上し、建国以来の社会的価値観が崩れはじめていた。韓寒はこのような大変動期において、青春文学の一大テーマである理想とその挫折を、彼らの日常生

活を通じて作品化して、中国新世代の若者たちの心を捉えたのだ。また、「韓寒現象」の白熱化が示すように、マスコミから一般市民までの社会全体が韓寒の退学問題から教育問題に至るまで、賛否両論を展開したのは、教育制度成熟期における典型的現象であったと言えよう。

このような『三重門』は二一世紀初頭の中国社会が二〇余年の改革開放政策により、社会主義体制から変化したことの文学的指標とも考えられよう。

むすび

韓寒は、民国期の銭鍾書の小説『囲城』及びアメリカ五〇年代のサリンジャーの青春小説『ライ麦畑でつかまえて』の両作から、語りのスタイルと物語の構造とを学び、この東西二作の古典的青春小説の後継作として『三重門』を創作し、二〇〇〇の中国に登場した。彼は文革以後に前世代の作家が書いてきた前衛小説等ではなく、民国期文学や現代欧米文学を出発点として、中国作家協会を中核とする体制内作家・主流文芸誌・国営出版社という「鉄の三角」[72]による規制を突破し、デビューから十三年経った現在も、中国の若者から強く支持されている。韓寒はその後も長篇『一九八八〜この世界と話したい』(二〇一〇)やブログにおいて言葉の魅力と、ストーリーの裏に秘めたメッセージにより常に「八〇後」世代の若い読者を魅了しつつ、中国現代文学の継承者として自らを「建国文学」、「十七年文学」、「新時期」などの流派と横並びに位置づけしている。これはまた既成文壇が韓寒に対して示す不快感とも関係している一方、彼の批判意識は、彼を青年読者層の精神的なリーダー、さらには「公共知識人」[73]とならしめた原因でもあると言えよう。

最後に、二〇〇九年九月四日の『北京青年報』[74]に掲載されたある評論[75]の一節を引用したい――「韓寒は、彼の文章と人格によって、新世代社会の中心的人物の社会的責任に対する斬新な理解、および人間性・道義に対するより深い理解を代表している。(中略)彼は旗幟のように、一つの時代の人々の一回また一回の「蜂起」を導き、そして徐々に社会という舞台の中心に近づき、社会の中心的人物の一つのメルクマールとなった」。[76]

「八〇後」文学において異質な存在である韓寒は、ようやく既成文壇派のマスコミにも認められ、中国文学史からもはや抹消不可能な作家の一人となったのである。筆者は今後、二〇〇〇年の『三重門』発表以後今日に至るまで、作家韓寒がどのように成長したのかについて考察していきたい。

---

1 「彎彎的月亮」『少年文芸』（南京版）一九九七年第七期、「書店」『少年文芸』（南京版）一九九七年第九期。

2 「教育该怎么辦」『萌芽』一九九八年六月号。

3 孫悦「“ 新概念作文大賽 ” 是如何萌芽的」、『編輯學刊』二〇〇八年第四期。

4 Hannah Beech「The New Radicals」二〇〇四年二月二日。http://www.time.com/time/world/article/0,8599,2047587,00.html

5 Wu Chen「Han Han: Finding happiness by being different」二〇〇九年九月二十三日。http://news.xinhuanet.com/english/2009-09/23/content_12100456.htm

6 顔昌海「壹萬個銅臭任正非，怎敢類比半個書香韓寒？！」二〇一一年四月二十日。http://blog.ifeng.com/article/10963162.html

7 「《獨唱團》發行量過百萬冊」、『出版商務週報』二〇一〇年八月一日。

8 『南方週末：二〇〇七新年特刊』二〇〇六年十二月二十八日第一一九四期。

9 『三重門』二一七頁。原文:《禮記 · 中庸》第二十九章:“ 王天下有三重焉。” 三重指禮儀、度、考文。

10 「三重門」を CNKI で全文検索した結果、計四五三一点の論文・エッセイがヒットし、すべてが一九九九年以降に発表されたものである。

11 平坂仁志訳（サンマーク出版）。

12 박명애訳（랜덤하우스코리아）。

13 最新版は二〇一三年五月に天津人民出版社によるものである。

14 荒井健・中島長文・中島みどり訳（岩波書店、一九八八）。上・下二冊がある。

15 劉勇・鄒紅『中国現代文学史』（北京師範大学出版社、二〇〇六）四七一〜四七四頁。

16 杉村安幾子「銭鍾書『囲城』小論 : 夢の終焉」『お茶の水女子大学中国文学会報』二〇〇一年四月、二二五頁。

17 『通稿二〇〇三 』（作家出版社、二〇一三）一〇三頁。原文:《圍城》真是很好的作品。這本書啟發我原來小說還能這樣寫。

18 一九世紀のロシア文学に現れた没落貴族・インテリゲンチアの一典型。新旧の階級からはみ出し、方向を失って無為に暮らす人。『広辞苑』第六版（岩波書店、二〇〇八）より。中国文学の余計者に関しては葉永勝「“ 零余者 ” 形象的世紀流變」

『江西師範大學學報』二〇〇四年第三七巻第二期などがある。

19 『結婚狂詩曲』（上）二七頁。

20 『結婚狂詩曲』（上）七〇頁。

21 『上海ビート』一七頁。原文：膽子小，把不滿放在肚子裡，僅供五臟之間作交流。

22 『三重門』一頁。邦訳版は意味がずれているため、拙訳を用いた。以下、日本語版の誤訳・省略箇所を拙訳で補った場合は斜字体表記とする。

23 『結婚狂詩曲』（上）九〇頁。

24 『結婚狂詩曲』（上）一四頁。

25 『三重門』二〇頁。原文：讓女的看了會自卑得要去削髮，男的看了恨自己的手沒有地方貪官的魔掌那麼長，只能用眼神去愛撫。

26 国広哲弥「五感をあらわす語彙－共感覚比喩的体系」『月刊言語』一九八九年第一八巻一一号、二八～三七頁。

27 岩本真理「比喩構造と形容詞 —— 後置比愉詞との共起を中心に」『大阪市立大学文学部紀要』一九九五年第四七巻第三分冊、一～二頁。

28 『三重門』一五頁。原文：語文書里作者文章的主題立意仿佛保守男女的愛情，隱隱約約覺得有那么一點，卻又深藏著不露。邦訳版：教科書に載っている文章は、たいていの場合は男女の愛情を守ることがテーマになっている。ところが、そうとわかっていても、本当に言いたいことは何重にもオブラートに包まれていて、なかなか露になることはない。

29 『上海ビート』三二頁。

30 『結婚狂詩曲』（上）一三六頁。

31 錢鍾書『七綴集』（上海古籍出版社、一九九四）七二頁。

32 「幾乎笑盡天下 —— 評《圍城》的冷嘲熱諷」『北京大學學報』一九九九年第二期。

33 『結婚狂詩曲』（下）一四六～一四七頁。

34 真銅正宏『小説の方法』（萌書房、二〇一〇）一一九頁。

35 『結婚狂詩曲』（下）七頁。

36 『上海ビート』二〇頁。

37 『通稿二〇〇三 』三四～三五頁。原文：中國文學沒有起色的很大原因是有這些做事說話極其不負責任但又裝出壹副很誨人不倦的樣子的人長期占據文學評論的權威位置（中略）他們的最大理想估計是文壇能變成壹個敬老院。

38 二〇一二年二月七日に鳳凰衛視で放送された著名な文化的テレビ番組「鏗鏘三人行」で、司会かつ文化人の竇文濤は「読んでいてすぐ物語から出てしまう —— 彼の大人ぶった言葉遣いに邪魔されて、彼のストーリーに入れなくなる（我一看就出戲，老被他的故作老成的文筆打擾，進不去他的故事）」と言い、梁文道は「彼が小説を書く時、大きな問題がある。それは彼がエッセイを書いている自分を小説に引き込

んでしまうことだ（他在寫小說的時候，有一個比較大的問題，就是他把寫雜文的自己帶了進去）」と述べている。

39 『結婚狂詩曲』（上）一五九頁。
40 『上海ビート』三八〇頁。
41 「再び雷峯塔の倒壊について」『魯迅選集第五巻』（岩波書店、一九六四）一五四頁。
42 『通稿二〇〇三』一〇三頁。
43 とも訳者不詳。
44 施咸栄訳。
45 二〇一三年七月七日、譯林出版社編集部担当の筆者宛メールによる。
46 創作は出版する二年前。『三重門』二四七頁。
47 張器友『二〇世紀末中国文学頽廃主義思潮』（安徽大学出版社、二〇〇五）
48 二〇一三年六月一〇日に CNKI でキーワード検索をした結果、三一二七字のエッセイ一点しかヒットせず、内容は主人公と主題の類似性を論じるものである。王靖涵「迷惘的少年和少年的迷惘 —— 试比较《麦田里的守望者》和《三重门》中的迷惘少年形象」、『考试周刊』二〇一一（二六）。
49 『ライ麦畑でつかまえて』野崎孝訳（白水 U ブックス、一九八四）三一頁。
50 『ライ麦畑でつかまえて』一九頁。
51 『ライ麦畑でつかまえて』二〇三頁。
52 『上海ビート』一〇二頁。
53 『上海ビート』一〇九頁。
54 『上海ビート』二〇一頁。
55 『上海ビート』二六四頁。
56 『上海ビート』二八二頁。
57 『ライ麦畑でつかまえて』一三三頁。
58 『ライ麦畑でつかまえて』二七一頁。
59 『ライ麦畑でつかまえて』二九三頁。
60 『ライ麦畑でつかまえて』二九三頁。
61 『ライ麦畑でつかまえて』二九九頁。
62 『ライ麦畑でつかまえて』三三六頁。
63 『ライ麦畑でつかまえて』三三六頁。
64 『上海ビート』四一五頁。
65 『ライ麦畑でつかまえて』九四頁。
66 『ライ麦畑でつかまえて』九五頁。
67 『ライ麦畑でつかまえて』二六九頁。
68 『上海ビート』四一五頁。

69 二〇一三年七月一三日、『一個』編集者の筆者宛メール。韓寒の返事原文：沒看過麥田裡的守望者，但覺得塞林格後來選擇隱居是無比正確的決定。

70 「学級崩壊をめぐって」、『学級崩壊はしつけでくいとめられるのか？』（チャイルドリサーチネット公開座談会、一九九九年八月九日）

71 Progressive Education Association が発起した教育改革実験であり、Thirty Schools Experiment とも呼ばれる。

72 中国作協「鉄の三角」体制については拙論「「八〇後」と現代中国出版市場の変容～韓寒を中心に」（二〇一四年一〇月刊行の『東京大学中国語中国文学研究室紀要』十七号に掲載）で論じた。

73 中国誌「南方人物週刊」は二〇〇五年より毎年五〇人の公共知識人を発表しており、韓寒の入選によって「公知」という言葉が広がったという。その基準とは「具体的な学術的バックグラウンドと専門の素養をもった知識人である」「社会に提言し、公共事務（社会問題）に参加する行動者である」「批判精神と道義を持ち合わせる理想主義者である」としている。

74 共産党の下部組織である北京共産青年団の機関紙。

75 張天潘「“ 不可愛 ” 的韓寒及其旗幟意義」

76 原文：韓寒，用他的文和人，代表著新壹代社會中流砥柱對社會責任的全新理解，以及對人性、對道義的更深刻理解。（中略）他如旗幟般，引導了壹個時代人的壹次次 “ 起義 ”，並慢慢地靠近了社會舞台的中心，成爲社會中流砥柱的壹個標志。